

宗教的意義が濃く深く満ちた静謐な空間に、腐乱した死骸がありました。円形の聖堂のまんなかに、それがありました。おだやかですんだ朝陽がそこに差し込みます。設計上、そうなるのだそうです。あかるくやさしいひかりに照らされたそれを、聖遺物のように感じました。実際は汚らわしいものであるのに。

わたしは異臭に思考を奪われました。驚きはすぐに逃げ去りました。たしかにあったけど、好奇心がおおきくふかく盛り上がりました。好奇心はわたしを歩ませました。入り口に立ち尽くしていたわたしでしたが、真ん中に続く通路をすすみます。

近づくにつれて死骸の詳細が分かってゆきました。初めて恋したあの時のように、心臓が早動していました。

裸体。刺殺。撲殺。眼球の存在しない空洞。そこに突き刺さるなにか。砕けた顎。裂かれた腹。陽の下に引き出された内臓。切り落とされた指。——あ、目に刺されてるのは指だ。ブルンズの長髪が口に入れられています。しかし歯がところどころ欠けています。

あと四歩というところで立ち止まります。そこまで来ておいて怖気づきます。

しかし、好奇心が立ち止まり続けることを許してはくれませんでした。すり足であと二歩のところまで寄ります。

指が刺さった空洞をのぞきこみます。

「……………」

涙の跡のように、かすれた血の跡が目の下にあるのに気づきました。

この人は殺されたとき、泣いたのでしょうか。

慣れるはずのない異臭を嗅ぎながら、膝について死骸を観察します。

じっと見つめて、周囲を見て、ふと思いました。

——うらやましい。

壮絶な経緯を経て悲惨な死を遂げたことは間違いないのに、うらやましく思えました。

——なぜだろう。

そう考えてしばらくして、「あ」と声を出した。

わたしは理解しました。

彼女の慣れ果ての死骸は汚らしく不快でおぞましいものであるにもかかわらず、美しく綺麗で整っていて静かで静謐なこの場所に決して埋もれない存在感がある。

決して誰にも愛されないものでありながら、誰しもを惹き付けるものに劣らないその気高さが、とてもとても羨ましく思ったのです。

「あなたは何をしたのかな…?」

返事がないことを理解していながら、わたしは問いかけます。

やがて、わたしは死骸の目から指を抜き取り、持ち去ってしまいました。